



リハーサル風景

カンマームジーク (室内楽)

カンマームジーク、つまり室内楽の喜びは独特のもの、とも言えようか。聞いていても美しく、それなりに迫力あるものだが、演奏する面白さはこの比ではない。しかし何千人も収容できる大ホールでのコンサートには不向きなため、現代日本の志向にはマッチしないかもしれない。

室内楽はその組み合わせにいろいろな種類こそあれ、常に小人数で構成されており、比較的大規模な編成でも通常指揮者は使わないで演奏する。それぞれのプレイヤーは真剣勝負でパートナーと対峙しなくてはならない。オーケストラの後ろの方の列に座って「ま、こんなもんか」と甘く構えてつき合っているのは、わけが異なるのだ。

自分で楽器を演奏して室内楽を楽しむのに、必ずしもプロ並みのテクニックを持つている必要はない。楽譜をやっと読めるようになったアマチュアが一生懸命にたどどしく演奏するのも、室内楽の味わいとアンサンブルの喜びは百パーセント楽しめる。

ウィーンに限らずヨーロッパでは、何世紀もの昔からこういった音楽が一般家庭で奏でられ、今日でも一家そろって合奏を楽しんでいる家庭が少なくない。

ヴァイオリンやチェロをマスターするのは困難でも、お父さんはアコーディオン、お母さんがヴォーカル、お姉さんはリコーダー、お兄さんがギター……といった組み合わせでなんとかなってしまふのだ。

もちろんクラシック専門の室内楽のプロも、星の数ほど存在する。それぞれが自分の音楽性を賭してリハーサルを行い、ある時は全員がひとつにまとまり、またある時はお互いに火花を散らし合いながら行う演奏は、そばで聞いているととてもスリリングだ。

ウィーンにも室内楽のプロ集団は多い。そんな団体の中から、弦楽トリオでは実力派の「ウィーン弦楽トリオ」が1989年11月に初来日した。

1972年に結成されたこの団体は、スタンダードの作品のみならず、オーストリアの現代作品も多数初演しており、このトリオのために書き下ろされ、献呈された作品も数多い。

この初来日のツアーには筆者もピアニストとして共演し、2曲あるモーツァルトのピアノ四重奏曲を中心に各地でのコンサートをを行った。

アンサンブルは確かに楽しい



チューニングに余念がない

が、プロの団体として固定のメンバーで活動するようになると、そこにはまた別の難しさが生じる。中でも「なれあい」が一番の敵となる。

室内楽団のメンバーはほとんどの場合同じ都市に住んでいる。同じオーケストラのメンバー同志、という事もよくあるケースだ。何はさておき、まずお互いの気が合わなければパートナーシップを維持していくのが難しい。

しかしその気心の知れあつた仲間同志がリハーサルをすると、仲が良いだけにどうしてもお互いに厳しくなれないまま終わってしまい勝ちなのだ。

たとえば目前で奏でられるヴァイオリンの音程が悪いな、と思つても、これをあからさまに口に出すと、相手をけなしていると誤解されるのではないか、などとつい遠慮してしまうのだ。1回限りの相手ならシビアに何でも要求できても、日常のつきあいもあるパートナーには、なかなか思つたことが言いにくいものである。

また別のケースとして、自分が忙しくて、あるいは健康上の理由からリハーサル前に万全の準備ができなかったとしよう。でもそれをわかってくれる仲間だから、と、つい自分を甘やかし、結局準備不

足のまま練習にのぞんで相手に迷惑をかけてしまうのだ。それでもまわりの人間は「仕方ないか」と、パートナーの明らかに不十分なレベルの音楽をつい容認してしまう。

こういった事がたび重なる、演奏の質が落ち、緊張が薄れ、とりかえしのつかない状況に陥ってしまう。

このような事態を防ぐため、メンバー同志お互いのプライヴェートな交際を極力避け、コンサートの中でもまったく没交渉、ホテルの場所と時間だけ、というようにして行動する団体も少なくない。そのかわり練習の場ではお互い容赦なくデイスカッションする。指がまわりきれいでいなかったり、音やリズムの間違ひは、そのまま当人の実力の評価に直結してしまう。

音楽の楽しみを犠牲にしてまで極限の完成度に挑み、その緊張の中で生み出された芸術が終局的には自分の音楽への愛と満足に通じる、という厳しい世界も存在するのである。

それでも自分以外の人と音を合わせる、というのは、毎回快い緊張感とともに、限らない楽しみをもたらしてくれる。